

えひめ国体に向けての県内競技団体・市町の取り組み

(公財) えひめ地域政策研究センター

研究員 渡部 卓

<えひめ国体開催まで5年となった>

県内各地においても、来るべきえひめ国体に向けて準備が進められている。競技団体では選手の育成・強化がおこなわれ、特に国体開催時に高校3年生となる現在の中学1年生を中心に強化が進められている。また、各市町では順次「準備委員会」や「準備課」の設置が進んでおり、まったなしの状況だ。

ここでは、えひめ国体でおこなわれる約40種目競技のうち「セーリング」「ウエイトリフティング」「バドミントン」の3種目についてレポートした。いわゆるマイナー競技と呼ばれるスポーツの競技団体が、国体を契機としていかに競技の普及や選手確保に取り組んでいるか、また競技開催市町の準備状況等について紹介したい。

1. セーリング

(1) 愛媛のセーリングの現状

県内にセーリングの拠点は3ヶ所あり、松山、新居浜、大三島である。その中でも現在競技活動を行っているのは松山だけである。

松山には県セーリング連盟が運営する「松山セーリングクラブ」があり、堀江海岸で活動している。専任スタッフ4名と部員の保護者たちが協力して指導にあたっている。部員は15名程度で推移しており小・中学生（ジュニア）から高校生（ユース）までレベルや年代に合わせて4つのグループにわかれて練習している。練習は、毎週土曜日・日曜日に行われ、午前8時に集合、昼食を挟んで午後4時頃に終了。安全面確保のため、ひとつのグループにエンジン付きのコーチボートが、必ず1艇張り付いて練習する。

海上での練習には選手が乗るヨットと、先にも述べ

たコーチボートが必要となる。ヨットを新艇で買えば約40万円から数100万円する。経済的な面をクリアするために、県連またはクラブ所有のヨットを貸し出している。



(2) 課題

まずは費用面だ。遠征には、自家用車が欠かせないのでガソリン代や高速道路代が必要。加えて、通常の大会で1～2泊、大規模な全国大会になると3～4泊の宿泊費がかかる。反面、ヨットの部品などは保護者が手作りで対応するなど創意工夫が見られる。

次に選手の発掘である。大きいイベントとして、例年5～7月に松山堀江海岸で体験教室をしており、ここ数年は新居浜でも開催している。教育委員会を通じて市内の全小学校にチラシを配布。毎回約100名以上の応募があるが、安全面を配慮して先着50名が体験している。しかしながら、このイベントに参加した児童の中から、クラブに入会するのが大体2～5名だという。やはり野球やサッカーとは違い自然に競技人口が増える状況では

ない。

(3) 国体に向けての取り組み

競技開催地の新居浜ではもともとクルーザー系の新居浜市ヨット協会の団体であったのが、国体の競技開催地に決まったのを受けて、新居浜市セーリング協会と改称し、セーリング競技に力を入れていくことを明確にした。セーリングの国体少年の部の参加資格は中学3年生から高校3年生なので、現在の小学4年生から中学1年生が育成ターゲットとなる。3年前（平成21年）には新居浜市ジュニアセーリングクラブが発足。開催地として、地元から国体選手を送り込もうと徐々に盛り上がりを見せている。また、競技会場となるマリパーク新居浜では、5年前から毎年、ジュニア世代の大会「坊ちゃんカップ」を開催。全国各地から多数の参加者が集まっており、併せて市民向けのイベントを開催するなど、市民へのアピールにも注力している。

一方、強化の最前線松山セーリングクラブでは、国体に向け今から10年前にジュニアの強化を開始した。よりよい練習環境を求めて、伊予市森海岸、五色浜、北条を経て、現在の堀江海岸で活動している。現在、堀江海岸はヨットのスロープが整備されたので、松山周辺で練習していたジュニア、ユース、大学、一般のすべてが集結し、松山セーリングクラブと松山大学のセーリング部のクラブハウスが軒を連ね、国体での「少年」と「成年」の一貫指導が可能となった。



(4) 競技会場の整備

セーリングの競技会場はマリパーク新居浜である。

新居浜市によると、昨年（平成23年）の中央競技団体の会場視察で指摘を受け、施設の整備方針を検討中であるが、主な整備内容としては、30～40mの仮設と既存のスロープ2本で対応し、艇庫を常設で新設する計画のようだ。

国体後においても、今回常設する艇庫はそのまま使用可能であり、既存のスロープも1本あるので、大会誘致等有効活用が期待される。

(5) 今後の愛媛のセーリング

愛媛には市街地から海が近いという、マリンスポーツの環境としては全国的にも恵まれているが、これまで注目されないままだった。また、金持ちが海で遊んでいるというイメージがあり、実際には限られた財源でやりくりして、情熱を持ってやっているのが、なかなか認知されていない状況だ。

また、県連盟理事長の黒川氏は、「本県においては、セーリングの愛好者はごく少数であり、いくら競技力の向上といってもなかなか簡単なことではない。徐々に階段を踏んでいかなければならない。競技人口を増やし、選手が中・高と進学しても競技を続けるためには、小中（ジュニア）から高校（ユース）までを対象とするクラブチームをつくるのが唯一の方策であった。

ようやく昨年（平成23年）の国体少年の部で3位入賞果たす等、成果がでてきている。その子も小学校3年生から付きっきりで教えてきた。時間も金もかかり、情熱もいるけど結果を残せば、愛媛でもセーリングをやっているんだと目が向く。徐々に愛媛のセーリングが盛り上がり、環境が良くなり、愛好者も増えればと思っている。」と語っている。

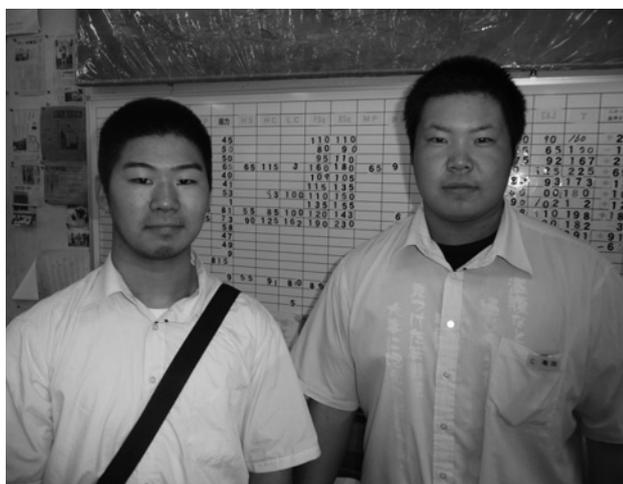
2. ウエイトリフティング

(1) 愛媛のウエイトリフティングの現状

愛媛のウエイトリフティングと言えば、新居浜市に拠点が集中しており、高校の部活動も新居浜工業と新居浜南の2校だけ（女子は新居浜南のみ）である。部員数も多く、他の運動部から羨ましがられるほどである。新居浜市は日本でも有数のウエイトリフティングの盛んなまちであり、地域にも根ざしている。新居浜市ウエイトリ

フティング協会は、戦後間もないころから75回も続く餅つき行事を行っており、ついた餅を市内の福祉施設に贈っている。また、市内中心部に位置する市営の重量挙げ練習場は日本で最初の市営練習場である。

この市営練習場は、主に新居浜工業の部活動練習場となっている。部活には、1984年ロサンゼルスオリンピック銅メダリストの真鍋和人氏を始め、新居浜工業のOBが加わり、顧問の石川教諭の指導の下、質の高い練習環境が整っている。平成23年度のインターハイと国体少年の部でそれぞれ53kg級で優勝者を出すなど実力も日本トップクラスである。



(2) 課題

何よりも選手の発掘である。新居浜工業の部活動は、今でこそ大勢の部員を抱えるが、10年ほど前には数名しかいなくなり存続の危機にあったという。もともと小学校低学年から始めることができる競技ではなく、子供たちには野球やサッカーが人気だ。いくら新居浜市にウ

エイトリフティングが根付いているとは言え、子どもの数自体が少なくなっている中、選手の確保は最大の課題である。

次に設備面だ。市営練習場には練習器具が豊富であり、練習環境には申し分ない。しかしながら、練習器具も進化しており、ハイレベルな練習を望むのであれば、良い練習器具も必要な要素だ。ウエイトリフティングは目標の重量に向き合う自分との戦いであり、それぞれの選手に応じた練習メニュー、練習器具が必要である。

(3) 国体に向けての取り組み

市ウエイトリフティング協会と新居浜工業の石川教諭が中心となり、えひめ国体に向けてジュニア世代（中学1年生～小学6年生）を対象にしたジュニアクラブを設立予定である。5年間で少年の部で活躍する選手を育成したい考えである。活動の内容としては、まずは遊びの要素を取り入れて基礎体力を鍛え、球技や体操を行い、体を動かすことの楽しさを感じてもらいながら、徐々に軽いバーベルを持たせてみるというように段階的に育成していく。場所は市営練習場を予定しており、実際に高校生や大人の練習雰囲気を感じてもらい、最終的には国体選手を送り込みたいという。

(4) 競技会場の整備

ウエイトリフティングの競技会場は新居浜市民文化センター大ホールを予定している。大規模な改修の必要はなく、プレ国体と国体本番のときにプラットフォームと呼ばれる試技を行う専用の床を設置するのみで良い。

また、国体のルールが変わり、成人の部と少年の部2会場が必要だったのが、えひめ国体では成人の部と少年の部を合わせて1会場でできることとなり、新居浜市としては文化センター大ホールのみでの対応でよく、経費負担も軽減された。

(5) 今後の愛媛のウエイトリフティング

現在の育成の現場は熱心な顧問の先生や、協会のバックアップに支えられている。部員も多く、愛媛（新居浜）のウエイトリフティングの5年後は明るいと感じた。

一つだけ付け加えるとすれば、選手の発掘、確保である。現在ウエイトリフティングを始めるきっかけは高校

入学時以降である。高校入学時まで運動経験のなかった選手が国体少年の部で優勝するケースもあり、ジュニア世代の適性を見極めるのは容易ではない。まずは「体験」する機会を中学生以下にも与え、身近に感じてもらうことが有力選手の発掘にもつながるのではないだろうか。

市ウエイトリフティング協会真鍋会長と石川教諭には夢がある。石川教諭の夢は、「新居浜で経験したこと(ジュニアクラブや部活の顧問)を活かして、地元の四国中央市でウエイトリフティングを広めたい」こと。真鍋会長は「オリンピック選手を新居浜から出す」ことだ。真鍋会長は続ける、「それには国体を無駄にしないこと。多くの市民の方に足を運んでもらい、ますます新居浜市のウエイトリフティングに興味や理解を持ってもらいたい。そして、競技人口が増えて、関心も高くなって、2020年東京オリンピックに選手を送り出す。東京に決まるかわからないけど、もし決まれば目標ができて一段と新居浜が盛り上がると思う。」と夢は大きい。

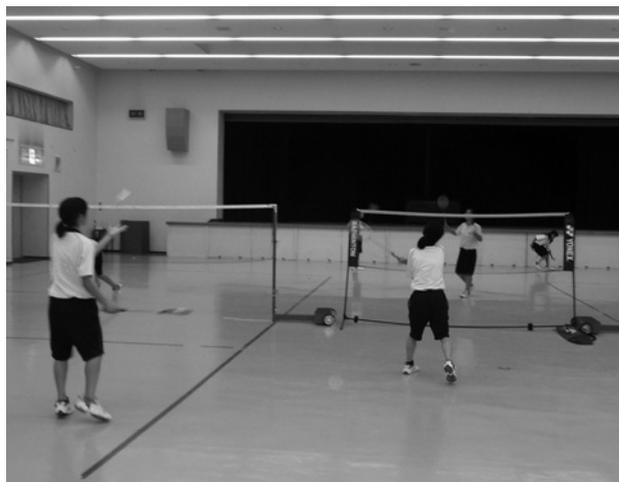


3. バドミントン

(1) 砥部町のバドミントンの現状

砥部町のバドミントンは、砥部町にある「陶街道ゆとり公園体育館」が、えひめ国体でバドミントンの競技会場になるのがきっかけに動き出した。県内のバドミントンは新居浜市を中心に東予地方が盛んで、一方砥部町内の松山南高校砥部分校、砥部中学校、麻生・内宮及び砥部小学校にはバドミントンをやる環境がなかった。県バドミントン協会は砥部町にバドミントンを広めようと、数年前から3つの小学校のクラブ活動の時間に年間8回

ペースで出前授業を始めた。この出前授業をきっかけに社会体育でのバドミントンクラブが設立された。町内の小・中学生を対象に県協会の役員が指導する形でスタート。地道な活動により中学生の部員が増加し、県協会は砥部中学校にバドミントン部をつくるよう働きかけた。砥部町としても、「砥部町から国体選手を送り込みたい」「国体を盛り上げて、国体ボランティアを確保したい」との意向があり、平成24年4月、バドミントン部が創部された。このように砥部町のバドミントンは、もともと社会体育で行っていたクラブを部活動へと発展させた珍しいケースである。現在砥部中学校バドミントン部は、1、2年生の約30人が活動(3年生は引退)。練習会場は、陶街道ゆとり公園体育館や教育委員会講堂を使っている。指導にはこれまでどおり県協会の役員と、新たに砥部中学校のバドミントン部担当の先生があたっている。



(2) 課題

砥部町から国体選手を出すには、育成プログラムの構

築が急務だ。新居浜市では小学生から競技としてバドミントンをする環境が整っており、それに比例して競技レベルも高い。平成24年度のU - 15（15歳以下）強化指定選手リストを見ても、約半数が新居浜市の所属だ。えひめ国体の少年の部で出場するのは、現在の中学1年生以下である。やはり、小学生からの継続した育成プログラムが必要であろう。

(3) 国体へ向けた取り組み

県協会ではU - 12（小学生以下）、U - 15（中学生以下）、U - 18（高校生以下）及び一般（大学生以上）の4つのカテゴリーに区分し、強化指定選手制度を設けて継続的な強化をおこなっている。また、外国人コーチも招聘し、県内各地で練習会を開催しており、砥部町の麻生小学校も会場となっている。

また、町民の意識の醸成のため、昨年度（平成23年度）県の補助を受けて「バドミントンふれあいフェスタ」を開催し、「オグシオ」で有名な小椋久美子さんと呼んだ。その前年には陣内貴美子さんと呼んでいる。これらの取り組みは町教育委員会と県協会が連携して実施した。

(4) 競技会場の整備

砥部町では、中央競技団体の正規視察が昨年（平成23年）行われ、その指摘事項の改善を中心に施設の改修を計画中である。

特に注文されたのが「照明を1200ルクスにすること」「観客席を増加させること（240席 → 600席）」「選手及び役員の控え室を設けること」の3点である。最低限これをクリアしないと競技会場としては難しいと指摘を受けており、国体後の活用も視野に入れて整備を検討している。

このうち「控え室」については、体育館横に補助体育館を建設。国体後は武道場としても活用する計画もある。

(5) 今後の砥部町のバドミントン

先にも述べたように、砥部中学校の部活は社会体育から部活へという珍しいケースである。部活動ではあるものの外部（協会）の指導者もあり、より専門的（ハイレベル）な指導が継続的に、安定的に期待される。また、国体本番の競技会場を普段の練習から使用することや、

地元の応援を背に望むことが可能であり、まさしく地の利を活かすことができるのである。レベルアップはこれからであるが、砥部中学校、県協会、行政が一体となって、5年後の国体に「砥部町で育った選手」を一人でも送り込むことができるように子供たちを導いて欲しい。